

「中 [道] の定説綱要」和訳研究 (2)

松本恒爾

1. はじめに

本稿は、*サハジャヴァジュラ (*Sahajavajra ca1000-1100) による『定説綱要』 (*Sthitisamāsa*, 以下 *SthS*) の中観派の定説を解説するセクション、「中 [道] の定説綱要」 (*Madhyamāsthitisamāsa*, 以下 *MStS*) の和訳研究である。前稿 (松本[2020]) では、v.56(1)からv.61(6)abまでのテキスト (サンスクリット語とチベット語訳) と和訳を提示し、その内容の解説を行なった。引き続き本稿ではv.61(6)cdからv.64(9)までをとりあげる。

2. MStSのテキストと和訳 (2)

2-1-4. 瑜伽行派に対する批判

2-1-4-1. 瑜伽行派の反論 (= 前主張)

[Skt]

na caivaṃ pūrvabādhaḥ syāt svapnatulyatayā sthiteḥ^[1] // v.61(6)cd

[1] em. sthite] Ms

[Tib]

**rmi lam dang ni mnyam gnas par// sngon du bkag pa nyid kyis^{<1>} min//
v.61(6)cd**

<1> kyi] P

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（2）

〔和訳〕

「しかし、次のように先の〔外界實在論者に対して行われた離一多性による無自性性論証を用いた〕排斥は〔我々瑜伽行派に対しては成立し〕ないだろう。〔何故なら、瑜伽行派にとって外的なものごとは〕夢と等しいあり方であるからである。」

〔解説〕

外的なものごと引き続き、離一多性による無自性性論証を用いた内的なものごとの存在性の捏造の排除（*astitvāropalopa*）が行われる。このことにあたって、v.61(6)cdでまず瑜伽行派の反論（＝前主張）が提示される。この反論は、離一多性による無自性性論証を用いることによって、極微などをはじめとする外的なものごとが存在すると主張する外界實在論者に対しては排斥が成立するが、外的なものごとは夢と同じあり方で存在しないと主張する瑜伽行派に対してはそれが成立しないということである。

ところで、v.61(8)cdではいかなる瑜伽行派が想定されているのであろうか。このことについては、ここでの情報だけで確定することは困難である。しかし、夢の比喩が無形象瑜伽行派（*Nirākārayogācāra*）の定説と有形象瑜伽行派（*Sākārayogācāra*）の定説のいずれの解説においても用いられていることからすれば⁽¹⁾、瑜伽行派全般が想定されていると考えられる。

2-1-4-2. 瑜伽行派に対する批判

〔Skt〕

na ca jñānasvarūpatvād virodho neti yujyate //

sāmānyena yato hetor upanyāso mataḥ satām // v.62 (7)

[Tib]

**shes pa'i rang bzhin med pa'i phyir// rig pa nyid 'gal ba min//
gang phyir spyi yi gtan tshigs kyis// brjod pa dam pa'i tshul yin no// v.62
(7)**

[和訳]

「しかし、『[外的なものごとは] 知識を固有の本質とするから、[離一多性による無自性性論証を用いた瑜伽行派に対する排斥が成立しないということに] 矛盾はない』ということは、妥当ではない。何故なら、[外的なものごとと] 共通して、[離一多性という] 証因から [内的なものごとである知識の存在性の捏造の排除が] 提示されると善き者たちは考えるからである。」

[解説]

夢の比喻からも理解されるとおり、瑜伽行派にとって外的なものごとは存在しない。では瑜伽行派にとって何が存在するのかというならば、それはあらゆるものごとの固有の本質である知識にほかならない⁽²⁾。しかしv.62(7)では、外的なものごとと同様に、内的なものごとである知識に対しても離一多性による無自性性論証を用いた存在性の捏造の排除があることが述べられている。

なおMStSでは、知識の存在性の捏造の排除がどのようなものかということが述べられていない。そこで、MStSが踏襲する『中観莊嚴論』(Madhyamakālamkāra, 以下MMA) 及び『自注』(vṛtti, 以下MMAV) の瑜伽行派に対する批判 (vv.46-60)⁽³⁾を参照しつつ、そのことを簡潔にまとめるなら次のようになるだろう。

知識には「知ること」という単一なる自性と形象 (ākāra) という多なる自性が考えられる。しかし、このように単一かつ多という矛盾する自性をもつものは存在ではない⁽⁴⁾。

ただし、MMA及びMMAVでは、知識の自性は単一ではなく多である

とする有形象瑜伽行派の反論や形象が習気（vāsanā）によって生じた真実ではないもの（atāttvika）であるとする無形象瑜伽行派の反論が想定されており、それらの反論に対するさらなる批判が展開されていることを付け加えておきたい。

以上で、MStS v.57(2)で述べられていた、論理（yukti）による存在性の捏造の排除が達成され⁵⁾、内的と外的いずれのものごとであっても非存在であり、あらゆるものごとが無自性であることが明らかにされた。

2-1-5. 世俗の定義とその撥無（= 虚無）の否定

[Skt]

**niḥsvabhāvam idaṃ viśvaṃ saṃvṛtyārthakriyākṣamam /
jñānajñeyaṃ dvayaṃ cārthaṃ kim asmākaṃ parikṣayā // v.63(8)**

[Tib]

**kun rdzob don byed nus pa yi// sna tshogs 'di ni rang bzhin med//
de ni shes dang shes bya nyid// kho bo ci zhig yongs su brtag/ v.63(8)**

[和訳]

「[MStS vv.58(3)-62(7)までに、離一多性による無自性性論証を用いて、]世俗として効果的作用に耐え、知識と知識対象という二である、この〔世の〕あらゆるものごとは無自性である〔ことが明らかになった〕。〔そのようであるならば、〕さらに我々の〔離一多性による無自性性論証を用いた世俗に対する〕検討によって何の意味があるのか。」

[解説]

v.63(8)では、以下のようなMMA vv.63-64が踏襲され⁶⁾、世俗の定義とその撥無（apavāda）の否定が述べられていると考えられる。

「あらゆるものごとは*MMA* vv.1-62までに述べられた離一多性による無自性性論証を用いた考察に耐えないので、] それ故に、これらの「あらゆる」ものごとは世俗という特徴をもつと把握される。もし「反対者によって」これらが対象（＝もの）と認められるならば、そのことについて我らによって何「の否定」がなされようか。」*MMA* v.63⁽⁷⁾

「考察されない限り好ましく、生と滅の性質をもち、効果的作用能力を自性とするものが、世俗なるものであると理解される。」*MMA* v.64
 de'i phyr dngos po di dag ni// kun rdzob kho na'i mtshan nyid 'dzing //
 gal te 'di dag don 'dod na// de la kho bos ci zhiḡ bya//
 ma brtags gcig pu nyams dag zhiḡ // skye dang 'jig pa'i chos can pa//
 don byed pa dag nus rnam kyī// rang bzhiḡ kun rdzobs pa yin rtogs// (Cf. 一郷[1985]II p.CXXV)

それでは*MMA* vv.63-64を参照しつつ、世俗の定義から見ていきたい。一見すれば、*MMA* v.64で述べられている世俗の定義のうち、「効果的作用能力（*arthasamarthya）を自性とするもの」つまり「効果的作用能力をもつもの」（arthakriyāsamartha）という定義だけがv.63(8)で承認されているようである。しかし、その他の定義が承認されていないのかというのならばそうではない。

その他の定義のうち、まず「考察されない限り好ましいもの」（*avicāraikaramaṇīya）という定義については⁽⁸⁾、「さらに我々の検討によって何の意味があるのか」という部分からそれが承認されていることが理解される。何故なら、「検討」（parīkṣā）という語は「考察」（vicāra）という語のと同義であると考えられ、そのようならば考察によって無意味となる世俗は、考察されなければ有意義（＝好ましいもの）であるからである。

さらに、「生と滅の性質をもつもの」、つまり「刹那滅性（kṣaṇikatva）をもつもの」という定義は、*MMAV*で「効果的作用能力をもつもの」と同義とされるので⁽⁹⁾、あらためて定義として述べられる必要がなかった

のだと考えられる。

このように、*MMA* v.64で述べられている世俗の定義は全て承認されているのである。しかし、このようであっても*サハジャヴァジュラの世俗説と*MMA*の著者であるシャーンタラクシタのそれは異なっていると考えられる。何故なら『真実十偈注』（**Tattvadaśakaṭikā*, 以下**TDT*）では⁽¹⁰⁾、*サハジャヴァジュラはシャーンタラクシタを自身の中観の立場とは異なる有形象中観（**Sākāramadhyamaka*, *mam pa dang bcas pa'i dbu ma*）の論師とするからである⁽¹¹⁾。なお**TDT*では、有形象中観について詳細に述べられていないが、有形象中観は世俗存在（*saṃvṛtisat*）を知識の形象とし、世俗唯心説を承認しているとされていることは周知のとおりである。

では、世俗唯心説と異なる*サハジャヴァジュラの世俗説とはどのようなものであろうか。このことについては松本[2016a]で論じたので、本稿では結論だけを述べておきたい。*サハジャヴァジュラの世俗説とは、世俗存在をあらゆる縁起したもの（*pratītyasamutpanna*, 縁已生）であるとする世俗縁起説であると考えられる⁽¹²⁾。そして、v.63(8)で「知識と知識対象という二である」という*サハジャヴァジュラ独自の世俗の定義が述べられているのは、*MMA*の世俗の定義を承認しながらも、自身の世俗説とシャーンタラクシタのそれが異なることを強調するためであると考えられるのである。つまり、世俗唯心説では内的なものごとである知識だけが世俗存在であるが、世俗縁起説では縁起したものであるという点において、外的なものごとである知識対象も世俗存在であるということである。

さて次に、世俗の撥無を否定することについてであるが、これは「考察されない限り好ましいもの」という世俗の定義としても機能する「さらに我々の検討によって何の意味があるのか」という部分から明らかであるだろう。では、あらゆるものごとが無自性であることが承認されるならば、何故世俗の撥無が否定されなければならないのだろうか。このことについては、世俗が勝義（*paramārtha*）つまりさとりに到達する契

機であるからであり、また中観派が虚無論者 (nāstika) と批判されることを避けるためであると考えられる。このような世俗の撥無の否定は中観派の共通認識⁽¹³⁾である。なお参考のために、世俗と勝義の関係性が詳細されている **TDI* の記述を以下に提示しておく。

「それ故に、眼病をもつ者によって [毛や二重月が] 見られるのと同じように、一切法を見る者は無智なる者である。[しかし] 眼病が治癒した者のように、あらゆるの形象を見ることがない者が勝者 (= 仏) なので [も] ない。さらに、あらゆるものを見ることがない者には、世俗諦が生じることがなく、それ (= 世俗) が存在しないから、どうして [世俗と勝義の] 双運 (*yuganaddha) となろうか。[世俗と勝義は] 所作性 (*kṛtakatva) と無常なるもののように、両者が存在しないならば、ありえないという性質 (mi 'byung ba'i bdag nyid) なのであり、木とシンシャパー [樹] のよう [な包摂関係] ではないのである。シンシャパー [樹] が存在しなくともダーヴァ [樹] 等は存在するから [木性そのものは存在するの] である。所作性と無常性 [の同延関係性] は相互排除 (*parasparaparihāra) ではない。それ故に、それら [所作性と無常性] は証明されるべきもの (*sādhya) (= 無常性) であり、証明するもの (*sādhaka) (= 所作性) として、優れた人によってそれぞれに両者ともに断じられず存在する。同様に、世俗と勝義も [そのように達成目標 (= 勝義) であり達成手段 (= 世俗)] である。それ故に、法界を現前する時に、世尊において世俗が減することもないのである。」(この記述に続いて、*MAv* Chap.6 vv.104-105, v.29, v.224, Chap.7/8 v.1, Chap.12 v.8 が引用される。)

de phyir rab rib can gyis mthong ba bzhin du chos thams cad mthong ba ni mi shes pa'o// rab rib gsal ba ltar rnam pa thams cad du mthong ba med pa ni rgyal ba ma yin no//^{<1>} yang thams cad du mthong ba med pa la ni kun rdzob kyi bden pa 'byung ba med de/ de med pa'i phyir zung du 'jug par ji ltar 'gyur/ byas pa nyid dang mi rtag pa ltar gnyi ga med na mi 'byung ba'i bdag nyid yin te/

shing dang shing sha pa ltar ni ma yin no// shing sha pa med kyang dā ba la
sogs pa yod pa'i phyir ro// byas pa nyid dang mi rtag pa nyid dag ni phan tshun
spangs pa ma yin no// de'i phyir de dag bsgrub par bya ba dang sgrub par byed
pa nyid du skyes bu'i bye brag gis so sor gnyis ka yang ma spangs pa nyid ni
yod do// de bzhin du kun rdzob dang don dam pa dag kyang ngo // de'i phyir
chos kyī dbyings mngon sum du byas pa'i dus su bcom ldan 'das la kun rdzob
'gog pa dag kyang med do// (**TDṬ* D167r2-6, P182v6-183r2.)
<1> add. yang thams cad du mthong ba med pa ni rgyal ba ma yin no//] P

2-1-6. 修習次第

[Skt]

viññānañ ca tad evātra rūpādiratibhāsanāt /

tathā ca sādhanasyāsyā^[1]...nāsiddhir yujyate...^[1] budhām^[2]// v.64(9)

[1] em. nāsiddhi yuhyate] Ms [2] em. buddhāh] Ms

[Tib]

gzugs sog̃s so sor snang ba ni^{<1>}// de nyid rnam par shes pa la//

**de ltar sgrub thabs^{<2>}...lta bu ste...^{<2>}// blo ldan rig pas mi 'grub med//
v.64(9)**

<1> la] P <2> lta byas te] P

[和訳]

「そして、この場合（＝MStH v.63(8)のように、あらゆるものごとが無自性であることが理解された場合）、『それ（＝あらゆるものごと）こそは識である。〔識は〕色など〔の外界のものごと〕を顕現させるからである』〔と修習され〕、さらに同じく〔あらゆるものごとを顕現させる識に対しても〕かの論証（＝離一多性による無自性性論証）が不成立であることは智者にとって妥当しない〔と修習されるべきである。〕」

[解説]

v.64(9)では、外的ものごとが非存在である唯心（*cittamātra*）の境地から、唯一残ったその心すらも非存在である空性の境地に到達するという修習次第（*bhāvanākrama*）が述べられていると考えられる⁽¹⁴⁾。そしてこのような修習次第は、以下のような*MMA* v.92⁽¹⁵⁾で述べられているものを踏襲しているのは明らかである。

「唯心によって外的なものごとは存在しないと知られるべきである。この方法（＝離一多性による無自性性論証）に依拠して、それ（＝唯心）についても最終的に無我であると知られるべきである。」*MMA* v.92
sems tsam la ni brten nas su// phyi rol dngos med shes par bya//
tshul 'dir brten nas de la yang // shin tu bdag med shes par bya// (Cf. 一郷 [1985]II p.CXXX)

さて、この修習次第について**TDI*では以下のように述べられている。

「非常に錯乱した者よって、[五] 蘊、[十二] 処、[十八] 界が空性としてどのようにして見られる [べきかというならば]、次のようにである

「唯心に上って、外的な対象が構想されなくなるだろう」『入楞伽經』(*Laṅkāvatāra*, 以下*LA*) Chap.10 v.256ab
cittamātraṃ samāruhya bāhyam arthaṃ na kalpayet / (Cf. Vaidya[1963] p.124)

一と世尊によって説示されている。

[これが世尊によって説示されたのは、] 修習されるべきものに適っているからであり、真言理趣（**mantranaya*）で説かれている如来の印の種類であるからである。照明する認識（**saṃvid*）の力である識こそが [五] 蘊、[十八] 界、[十二] 処の本質と理解してから、一そのことを多数は有形象、少数は無形象 [と理解する] けれども、[我々にとっては]

空性三昧の体験（*śūnyatāsamādhyanubhava）となる。—その〔空性三昧の〕智も縁起したものであり、照明となるから非存在ではなく、勝義としてはものごとの性質は不生起であるから存在でもない。〕

ji ltar shin tu gYeng bas phung po dang / skye mched dang / khams rnam stong
pa nyid du mthong ste/ de ltar yang /

sems tsam nyid la brten nas su/ /phyi rol don la mi rtog go /

zhes bcom ldan 'das kyis bstan<1> te/ bsgom par bya ba dang rjes su mthun pa'i
phyir ro// gsang sngags kyi tshul bstan pa'i de bzhin gshegs pa'i rgya'i<2> rigs yin
pa'i phyir dang / gsal bar 'gyur ba'i rig<3> pa'i stobs kyi<4> rnam par shes pa nyid
phung po dang khams dang / skye mched kyi bdag nyid rnam<5> rig pas de yang
phal cher rnam pa dang bcas pa dang / cung zad rnam pa med pa yang stong pa
nyid kyi ting nge 'dzin nyams su myong bar 'gyur ro// <6> ye shes<7>...de yang...<7>
rten cing 'brel par 'byung ba'i phyir dang / rab tu gsal bar 'gyur ba'i phyir med
pa ma yin no// don dam par dngos po'i ngo bo ma skyes pa'i phyir yod pa ma
yin no// (*TDT D168r7-v3, P184r4-7.)

<1> brtan] P <2> om. rgya'i] D <3> rigs] P <4> kyis] P <5> em. rnam] P D
<6> add. de yang] P <7> om. de yang] P

この*TDTの記述では、外的ものが非存在である唯心の境地が、真言理趣で説かれる如来の印の種類とされていることが注目される。このことは、v.64(9)で述べられている修習次第と同じく、*サハジャヴァジュラの師であるマイトレーヤナータ（Maitreyanātha a.k.a. Advayavajra）やその門下の著作⁽¹⁶⁾で述べられる密教的修習によっても唯心の境地に到達することができるということであると考えられる。なお、この密教的修習を簡潔にまとめるならば以下のようなになるだろう。

色、受、想、行、識（＝五蘊）と空性をそれぞれ毘盧遮那、宝生、無量光、不空成就、阿闍、金剛薩埵とする。そして、四如来（＝色、受、想、行）を阿闍（＝識）によって刻印することで唯心の境地に到達し、さらに阿闍を金剛薩埵（＝空性）によって刻印することで空性の境地に

到達する。

さて、修習次第によって到達する境地として唯心が組み込まれていることやv.63(8)の〔解説〕で述べたようにその世俗説が世俗唯心説ではないことからするならば、*サハジャヴァジュラの唯心説は、外的ものごとが非存在である唯心を修習の次第としてだけ承認する説、つまり方便唯心説であるということができらるう。

そしてさらに、*サハジャヴァジュラは、彼自身にとって中観派の正統な論師であるチャンドラキールティの唯心説も方便唯心説と考えているようである。このことは、*TDTで以下のようなMAvが唯心が未了義であることの根拠として引用されていることから理解することができる⁽¹⁷⁾。

「ある経典でも『外に見られるものは存在しない。心が様々に見られるのである』と言われている。色に非常に執着する者たち、彼らのために色を排斥する。さらに、そのことは未了義であると理解せよ。」MAv Chap.6 v.94

ya trāpy uktam nāsti dr̥śyaṃ bahir vai cittaṃ citraṃ dr̥śyate ceti sūtre /
rūpe 'tyantaṃ ye prasaktā badhāna rūpaṃ tebhyas tac ca neyārtham ehi // (Cf. Li[2014] p.12)

しかしこのMAvの本来の意図は、唯心という教説が未了義であることではなく、外的ものごとが存在しないという教説が未了義であるということである。何故なら、チャンドラキールティにとっての唯心とは、外的ものごとの非存在ではなく、世間では外的ものごとより心だけが主要であるということの意味するからである⁽¹⁸⁾。

このように、チャンドラキールティの唯心説が方便唯心説であることは、*サハジャヴァジュラの完全な誤解である。しかし、この誤解は意図的なものである可能性が高いと考えられる⁽¹⁹⁾。何故なら、唯心が外的ものごとの非存在を意味しないとするならば、v.64(9)で述べられている修習次第は成立せず、さらに密教的修習—具体的には毘盧遮那 (=

色）に対する阿闍（＝識）の刻印—も成立しないからである。

このようなことから、*サハジャヴァジュラにとって中観思想より密教の実践のほうが優先されるべきものであるということが理解できるだろう⁽²⁰⁾。【続】

*紙幅の関係上、松本[2020]で既出の略号と参考文献については省略した。

[参考文献]（紙幅の関係上、本稿で言及したものだけとした。）

〈一次文献〉

- ・ *Jñānasārasamuccaya (JSS)* by Āryadeva. Toh 3851, Ota5251. And see 山口 [1944] pp259-351 and Mimaki[2000].
- ・ *Jñānasārasamuccayanibandhana (JSSN)* by Bodhibadra. Toh 3852, Ota5252.
- ・ *Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa (PTMV)* by Maitreyaṇātha a.k.a. Advayaṅjra. See 密教聖典研究会[1988] pp.189(46)-178(57) and Mathes[2015] pp95-106.
- ・ *Madhyamakāloka (MMA)* by Kamalaśīla. Toh3887, Ota5287.
- ・ *Madhyamakāvātāra (MAv)* by Candrakīrti. Ota5261, [revised ed.]Toh3861, Ota5262. And see Li[2014].
- ・ *Madhayamakāvātārabhāṣya (MAvBh)* by Candrakīrti. Toh3862, Ota5263. And see LVP[1907-12] and L.L.M.K.[2022].
- ・ *Madhayamakāvātāraṭīkā (MAvT)* by Jayānanda. Toh3870, Ota5271.
- ・ *Munimatālaṅkāra (MMAI)* by Abhayākara Gupta. Toh3903, Ota5299 And see 磯田[1984][1987][1991][1998], 加納・李[2013][2014][2015][2017a][2017b][2018][2019][2021], 李・加納・横山[2015][2016], Li&Kano [2019][2020].
- ・ *Mūlamadhyamakakārikā (MMK)* by Nāgārjuna. See Ye[2011].

〈二次文献〉

- ・ 一郷 正道

- 2015 : 『ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想』, 東本願寺出版。
- ・磯田 熙文
- 1984 : 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṃkāra』 (Text) (I)」, 『東北大学文学部研究年報』 vol.34 pp.320-251.
- 1987 : 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṃkāra』 (Text) (II)」, 『東北大学文学部研究年報』 vol.37 pp.176-138.
- 1991 : 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṃkāra』 (Text) (II)」, 『東北大学文学部研究年報』 vol.41 pp.188-147.
- 1998 : 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṃkāra』 (Text) 第II章」, 『東北大学文学部研究年報』 vol.48 pp.304-273.
- ・加納 和雄・李 学竹 (=加納・李 *or* Kano & Li)
- 2013 : 「梵文『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālaṃkāra) 第一章の和訳と校訂—冒頭部—」, 『密教文化』 vol.229 pp.37-63.
- 2014 : 「梵文『牟尼意趣莊嚴』 第1章末尾部分の校訂と和訳—『中観光明』一乗論証段の梵文回収—」, 『密教文化』 vol.232 pp.7-42.
- 2015 : 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』 第一章 (fol. 48r4-58r5) — 『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説—」, 『密教文化』 vol.234 pp.7-44.
- 2017a : 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』 第一章 (fol. 58r5-59v4) — 『中観光明』四諦説三性説箇所佚文—」, 『密教文化』 vol.238 pp.7-27.
- 2017b : 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』 第一章 (fol. 59v4-61r5) — 『中観光明』世俗の定義箇所佚文—」, 『密教文化』 vol.239 pp.7-26.
- 2018 : 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』 第一章 (fol. 61r5-64r2) — 『中観光明』世俗と言説および唯心批判箇所佚文—」, 『密教文化』 vol.241 pp.31-56.
- 2019 : “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the Munimatālaṃkāra—Chapter 1: Fols. 4r3-7v4—”, *China Tibetology* 32 pp.59-66.
- 2021 : 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』 第一章 (fol. 64r2-67v2) — 『中観光明』佚文・行者の直観知無自性論証—」, 『密教文化』 vol.246 pp.5-

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（2）

39. 岸根

- ・ 岸根 敏幸

2001：『チャンドラキールティの中観思想』, 大東出版。

- ・ la Vallée Poussin, Louis de (=LVP)

1907-12： *Madhyamakāvātāra par Candrakīrti* [Bibliotheca Buddhica 9], St. Pétersbourg (repr. Motilal Banalasisidass 1992).

- ・ Lasic Horst, Li Xuezhū, MacDnald Anne and Krasser Helmut (=L.L.M.K.)

・ 2022： *Candrakīrti's Madhyamakāvātārabhāṣya Chapters 1 to 5*, , China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press.

- ・ 2014： Li Xuezhū (李 学竹)

2014：“Madhyamakāvātāra Chap.6”, *Journal of Indian philosophy* vol.43 pp1-30.

- ・ Li Xuezhū (李 学竹) & Kano Kazuo (加納 和雄)

2020：“A Survey of Passages from Rare Buddhist Works Found in the *Munimatālamkāra*”, In Birgit Kellner, Li Xuezhū and Jowita Kramer(eds.), *Sanskrit Manuscripts in China III: Proceedings of a panel at the 2016 Beijing International Seminar on Tibetan Studies August 1 to 4* pp.45-78, China Tibetology Publishing House

- ・ 李 学竹・加納 和雄・横山 剛 (李・加納・横山)

2018：「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』——一切法解説前半部—」, 『インド学チベット学研究』 vol.19 pp.139-157.

2021：「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』——一切法解説後半部—」, 『インド学チベット学研究』 vol.20 pp.53-75.

- ・ 松本 恒爾

2020：「「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（1）」, 『現代密教』 vol.30 pp.(39)-(60).

- ・ 松本 史郎

1986：「後期中観思想の解明にむけて——郷正道氏『中観莊嚴論の研究』を中心に」, 『東洋学術研究』 vol.25 pp.177-203.

- 1997：『チベット仏教哲学』, 大東出版。
- ・ Mimaki Katsumi (御牧 克己)
2000：“*Jñānasārasamuccaya* kk° 20-28 *Mise au point with Sanskrit Manuscript*”, In Jonagthan A. Silk (eds) *WISDAM, COMPASSION, AND THE SEARCH FOR UNDERSTANDING - The Buddhist Studies Legacy of Gadin M. Nagao* pp.233-244.
 - ・ 中沢 中
・ 2009：「幻の本質—『中観莊嚴論』63偈」*Acta Tibetica et Buddhica* vol.2 pp.141-203.
 - ・ 山口 益
1944：『中観仏教論攷』, 山喜房仏書林。
 - ・ Ye Shaoyong (葉 少勇)
2011：『〈中论颂〉梵藏汉合校・导读・译注』, 中西書局。

註

- (1) 「無形象瑜伽行派の定説綱要」v.37(5) (Cf. 岩田[2010] pp.6-7) と「有形象瑜伽行派の定説綱要」v.47(1) (Cf. 岩田[2014] pp.24-25) で、夢の比喩が用いられている。なお、一連の岩田論文と *SthS* の偈の通し番号が異なっているのは、岩田博士と筆者の偈の数え方が異なるからである
- (2) 正確にいうならば、以下の『智心髓集』(*Jñānasārasamuccaya*) で述べられているように瑜伽行派では主観と客観を離れた知識が真の存在とされる。
「客観と主観を離れた識が勝義有である。」*JSS* v.26ab.
grāhyagrāhakanirmuktam vijñānam paramārthasat / (Cf. Mimaki[2000] p.240.)
- (3) 有形象瑜伽行派に対する批判は *MMA* vv.46-49 で行われ、無形象瑜伽行派に対する批判は *MMA* vv.50-60 で行われる。
- (4) このような批判は、無形象瑜伽行派による有形象瑜伽行派に対する批判としても機能する (Cf. 岩田[2010] pp.11-13)。
- (5) 松本[2020] p.41 で提示したシノプシスによれば、これ以後も「論理による存在性の捏造の排除」が続くことになる。しかし、*MStS* v.63(8) が「聖典による一切法無自性の覚悟」の冒頭にあたる *MMA* vv.63-64 を踏襲しているとするなら、*MStS* v.63(8) 以後は「聖典による存在性の捏造の排除」としなければならない

「中〔道〕の定説綱要」和訳研究（2）

可能性がある。しかしそのようであったとしても、その「聖典による存在性の捏造の排除」がMSthSのどこまでなのかということが未だ明らかではない。それ故、本稿以降でも松本[2020]で提示したシノプシスをとりあえず採用し、本和訳研究の最終段階においてシノプシスを再度提示したいと考えている。

- (6) 内容だけではなく、一連の離一多性による無自性性論証の直後に置かれているという位置関係や偈としての構造がMMA v.63とよく似ていることもその根拠となるだろう。なおMMA vv.63-64は**TDṬ*で引用されている（Cf. 松本[2015] p.51）。
- (7) 以下のように、**TDṬ*では「考察に耐えない」（*vicārāsaha or *vicārākṣama）という表現が使用されていることもその根拠となるだろう。

「形象を伴う活動が、有形象の知識である。形象を伴う照明（*prakāśa）が無形象〔の知識〕である。そのうち、「有形象」という語によって、経量部と瑜伽行派たちが把握される。さらに、「無形象」という語によって、毘婆沙師と瑜伽行派の分派がまとめられている。これらによって、有形象と無形象の主張がまとめられているのである。〔しかし、〕〔両者の主張は、〕「真如を知ろうとする（tathatām jñātum icchataḥ）」人々にとって承認されるべきものとはならない。〔何故なら、〕両者（＝有形象論者と無形象論者）のいずれによっても、〔知識という〕自性が承認されているからである。〔しかし、〕それ（＝有形象論者と無形象論者によって自性として承認されている知識）も考察に耐えないので、真実の特徴を離れているのである。」

rnām pa dang bcas pa'i 'jug pa ni rnām pa dang bcas pa'i shes pa'o// rnām pa <1>...dang bcas pa'i...<1> gsal ba ni rnām pa med pa'o// de la rnām pa dang bcas zhes bya ba'i sgras mdo sde pa dang / rnal 'byor spyod pa pa dag gzung ba'o// rnām pa med pa zhes bya ba yang bye brag tu smra ba dang rnal 'byor spyod pa'i bye brag dag bsdu pa'o// 'di dang gi rnām pa dang bcas pa dang rnām pa med pa'i 'dod pa bsdu pa'o// **de bzhin nyid ni shes 'dod pa** 'i<2> skye bu dag gi blang bya nyid dag tu mi 'gyur te/ gnyis kas kyang rang<3> bzhin du khas blangs pa'i phyir ro// de yang dpyad mi bzod pas de<4> kho na nyid kyi mtshan nyid dang bral ba yin no// (**TDṬ* D164r3-5, P179v2-4.)

<1>om. dang bcas pa'i] P <2> pas] P <3> om. rang] P <4> em. om.] P D

- (8) MMA v.63の [] による補足はMMAV ad v.63にもとづく（Cf. 一郷[1985] I pp.160-161 and II pp.196-200）。また、MMA v.63のテキストに関する議論については、松本[1986]、中沢[2009]を参照。
- (9) 以下のようなMMAV ad v.8による。

「このようであるなら、効果的作用能力（*arthakriyāsamarthyā）は刹那減性であると確定される。」

de lta bas na don byed nus pa ni skad cig pa nid du nges so// (Cf. 一郷[1985]II p.40 l.18)

- (10) **TDṬ* D 164v5-165v6, P 180v3-5を参照。なお、ここで引用される*MMA*については、松本[2015]を参照。
- (11) **TDṬ*と同じくチベット仏教の宗義書 (*grub mtha'*)でも、しばしばシャーンタラクシタは有形象中観派に分類される。しかし、シャーンタラクシタの真の立場は世俗唯心説ではなく、修習の次第として外的なものごとを否定する唯心を承認する方便唯心説であることが指摘されている (Cf. 松本[1997] 第三章「瑜伽行中観派について」)。なお筆者にとってこの指摘はかなり説得力をもつものである。
- (12) **TDṬ*の記述 (Cf. 松本[2016a] p.223-224)によれば、*サハジャヴァジュラは世俗縁起説をチャンドラキールティ独自のものと考えているようである。しかし、*MMAV* ad v.64でも以下のように世俗存在が縁起したものであるとされる。
- 「この世俗とは言葉の営為だけを本質とするものではなく、経験され認められた縁起したものごとであり、[それは] 考察に耐えない、正世俗 (**tathyasamvṛti*) である。」

kun rdzob 'di sgra'i tha snyad tsam gyi bdag nyid ma yin gyi / mthang ba dang 'dod pa'i dngos po rten cing 'brel par byung ba rnams ni brtags mi bzad pas yang dag pa'i kun rdzob ste/ (Cf. 一郷[1985]II p.204 ll.1-3.)

シャーンタラクシタが世俗唯心説を承認する有形象中観派であるとするならば、この*MMAV*で述べられている縁起したものごととは、外的なものごとを含まない主観と客観により依他起 (*paratantra*) した知識だけであるということになるだろう (Cf. 松本[1997] 第三章「瑜伽行中観派について」 pp.122-123)。このようなかなり無理のある解釈をしなくてはならないことからしても、やはりシャーンタラクシタの真の立場は方便唯心説である可能性が高いと考えられる。

- (13) このような中観派の共通認識の根底には、中観派の祖とされるナーガールジュナ (*Nāgārjuna*) の以下のような『根本中論頌』 (*Mūlamadhyamakakārikā*, 以下 *MMK*) まで遡ることができる。

「二諦に依拠して諸仏の法の説示がある。[二諦とは] 世間世俗諦と勝義としての諦である。」 *MMK* Chap.24 v.8

「この二つの諦の区別を理解しない者たち、彼らは深遠な[諸] 仏の教えにおける真実を理解しない。」 *MMK* Chap.24 v.9

「言語習慣にもとづかなければ、勝義は知られない。勝義に到達しなければ、涅槃は獲得されない。」 *MMK* Chap.24 v.10

「誤って見られた空性は、誤って捉えられた蛇のように、あるいは誤って成

就した明呪のように、愚か者を破滅させる。」 *MMK* Chap.24 v.11

dve satye samupāśritya buddhānāṃ dharmadeśanā /

lokasaṃvṛtisatyam ca satyam ca paramārthataḥ //

ye 'naylor na vijānanti vibhāgaṃ satyayor dvayoḥ /

te tattvaṃ na vijānanti gambhīraṃ buddhaśāsane //

vyavahāram anāśritya paramārtho na deśyate /

paramārtham anāgamyā nirvāṇaṃ nādhigamyate //

vināśayati durdṛṣṭā śūnyatā mandamedhasam /

sarpo yathā durgrhīto vidyā vā duṣprasādhitā // (Cf. Ye[2011] pp.420-423.)

- (14) 松本[2016a]では、*サハジャヴァジュラがこのような修習次第を批判している
と筆者は述べているが、これは誤りであるので訂正したい。このことの他に松
本[2016a]には多くの誤りがある。いずれ別稿をもうけて、これらの誤りを訂
正しつつ、*サハジャヴァジュラの思想について再考したい。

- (15) *MMA* v.92は**TDṬ*で引用されている (Cf. 松本[2015] p.51)。

- (16) 例えば、マイトレーヤナータの『五如来印詳説』(*Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa*)
や*ヴァジュラパーニの『師資相承次第説示』(**Gruparamparāṅkramopadeśa*) な
どである。なお *SthS* の真言理趣を解説するセクションでも以下のように述べら
れている。

『[[五蘊は] 刹那滅である]、[[五蘊は] 識を性質とする]、[[五蘊は] は空
である』という決定より、『[[五] 蘊は [[五] 如来たちである] や [[五蘊は]
金剛薩埵である』という方が優れた決定である。

kṣaṇikā jñānarūpā vā śūnyā veti hi niścayāt /

skandhās tathāgatā vajrasattvo veti hi svaniścayaḥ // (Cf. Onians[2003] p.142.)

- (17) 現在見返すと不正確な部分を含むものの、この**TDṬ*の箇所は松本[2016a]
pp.218-219で翻訳されている。

- (18) このようなチャンドラキールティの唯心説の詳細については、岸根[2001]の第
四章「唯識思想批判」第六節「唯心解釈」を参照。

- (19) なお、サハジャヴァジュラ在世時代にチャンドラキールティの唯心説が正確に
理解されていなかったわけではないことは、彼とはほぼ同世代であるアバヤーカ
ラグプタ (*Abhayākara-guṇa*) の『牟尼意趣莊嚴』(*Munimatālamkāra*) などから
知ることができる (Cf. 加納・李[2018] pp.116(51)-115(52).)。

- (20) このように*サハジャヴァジュラにとって、中観思想より密教の実践が優先さ
れるべきものであることは、*SthS* で *MStS* の後に真言理趣を解説するセクショ
ンが置かれていることや、註 (16) で提示した *SthS* の偈からも理解することが
できる。

〈松本[2020]正誤表〉

- ・ p.44 l.10 自注 → 『自注』
- ・ p.46 l.28 *pratyasāmbhedasāmbhavāt* → *pratyasābhedasāmbhavāt*
- ・ p.48 l.28 無自性論証 → 無自性性論証
- ・ p.52 l.18 <3> Ppar → <3> P par
- ・ p.52 l.19 無自性論証 → 無自性性論証
- ・ p.57 l.11 Dharmakīrti → Dharmakīrti
- ・ p.59 l.19 pp.56-67 → pp.56-57

〈キーワード〉 *Sthitisamāsa* Madhyamāsthitisamāsa Candrakīrti Śāntarakṣita